

# 文 化

落語家の参遊亭遊助と申します。37年の会社員経験を生かし、一風変わった落語を作っております。企業の歴史や創業物語を題材にした、その名も「落語DE社史」。

経営者に話を聞きその企業のためだけに作る、完全オーダーメイドだ。今まで荻野精機製作所、山一陸送産業、ラジエン、スウェアなどの社史を落語にした。大々的な宣伝はせず、偶然知り合った経営者や人づてに依頼を受けてきたため、まだ何十社とはいかないが、縁を大事にライフワークとして取り組んでいる。

落語との出会いは小学生の頃、ラジオにかじりついて聞いていた。あるとき親戚の法事で、母に言われて覚えた落語を披露した。子どもが一生懸命やるからか大ウケで、氣をよくした私は、以来演劇に出たり漫談をしたりと、人前で演じる楽しさのとりこになった。

1981年に大学を卒業し横浜銀行に入っても変わらず、経営学修士号(MBA)取得のため米

## 企業の歴史唯一無二の落語に

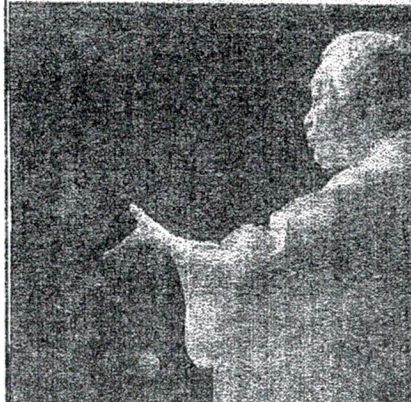
◇会社員経験を生かしオーダーメイド 笑わせるだけでなく発展を後押し◇ 豆生田 信一



ミシガン大学に留学中も、1人オベラや1人合唱団と称して級友に披露した。録音設備保障(ALSOW)へ転職し、タライ子会社の社長を任せられると、現地の日本人劇団で活動した。帰国後は予定が合わず、1人でできることを探そうと、大好きな落語に舞い戻った。

2014年に三遊亭遊三師匠の生徒に。創作落語を始めたのは、私が通う教会で聖書を分かりやすく伝える落語を作っていたと声をかけられたのがきっかけだ。

社史落語を思いついたのは息子の話から。俳優の彼はある企業から創業者の半生を演劇にする依頼を受けたという。聞くとなかなか金額だ。演劇もだが、分厚い社史を作るにはお金がかかるし、飽まな社員も少ないと思う。落語にす



会社に関わる人の思いに光を当てる

れば面白おかしく聞いてくれるかもしれないとひらめいた。

荻野精機の社史落語では、何でも切れる「スーパークッター」が強みだと聞き「初めて聞いた時はスーパード何を買ったのかと思いました」とシヤレを入れ「何でも切れるが、切れないのは客と取引先との輪」としめる大きな拍手を頂いた。

資金繰りに行き詰まったり、改革で社内の反発を受けたり、商品が売れず困ったり。落語作りを通じて企業が持つ物語に触れられるのも魅力だ。

事前に専門用語を頭には2時間ほど頂く。事業に興味を持ち、経営者の苦勞に共感できるのは、銀行員時代やタイで社員を引く振る立場の経験が生きていると感じる。

会社の歴史は人の努力の積み重ねだ。関わる人々の信念や会社の理念が表れる話を掘り起こす。創業メンバーの名前、会社の拠点を改めた取引先や金融機関があれば社名を盛り込む。笑わせるだけでなく、企業のさらなる発展のささやかな後押しになればとの思いだ。

山一陸送産業の落語には、過去に起こしてしまった事故の話を入れた。社長は被害者の墓参りを続け、その真摯な姿勢に、最後には遺族から法事に出席してほしいと言われたそうだ。痛ましい出来

事もその社史を形作るものだから、できるだけ織り込むようにする。

「我が社の宝だ」との言葉をかけられたり、15周年記念で作った企業に「20周年もお祝い」と言われたり、思いを込めて作ったものが喜ばれるとうれしい。以前作った夫婦のなれぞめ落語や故人の想い出落語、同僚会落語にも同じ魅力がある。

コロナ禍の最近では、ギニアやメキシコに住む駐在員の方に頼まれオンライン落語に挑戦した。これからも、新商品の開発物語や採用説明会、お声がけ頂ければどんな落語でも作りたい。(まめうだ・しんいち元会社員)

名画として名高い本作を東京国立近代美術館の常設展示室で見えた女性



安井曾太郎「金巻」